付篇

館蔵品調査報告
－古墳時代から平安時代の遺物－

横山　成己

1．はじめに

筆者は山口大学埋蔵文化財資料館に着任以降、山口県内遺跡出土の所蔵未公開資料の学術公開を継続的に実施しているが、大きな障害となるのが資料情報の欠落であった。平成26年度には、そのために死蔵状態が続いている資料を対象に、観覧者に情報提供を求めることを目的とした企画展を開催した[註1]。展示の開催に当たり、できる限り資料調査を行い、わずかではあるが展示期間中の情報提供もあった。本稿にてその調査報告を行いたい。

2．資料報告

[花岡古墳群]（図67、写真114のHO1～5）

花岡古墳群出土と目される資料群に関しては、『山口考古』第34号（横山2014）に詳細を記している。これらの資料が出土・採取されたとされる下松市花岡八幡宮裏山は、末武平野北部にて熊毛丘陵から細く南に派生する標高約70mの支脈である。その南端部に八幡宮楼門や多宝塔、本殿が立地し、境内の北方背後は昨今草木で覆われているが、かつては花岡公園の名称で整備されていたそうである。現在支脈の南半部は「花岡古墳群」の名で埋蔵文化財包蔵地に指定されている。2ないし3基存在したと思われる円墳は、いずれも半壊・全壊状態にある。

資料の由来に関しては、資料の注記HO1「花岡八幡宮々司　村上文建氏　寄贈　一九五〇・七・二九」や遺物カードHO3「桜ヶ岡□（高か）　花岡八幡　小川宣氏」、HO4「遺物名　弥生式土器片　発見地　下松市花岡町花岡八幡宮　発見者～発掘者　小川　藤本　山本　棟近　発見～発掘年月日　昭和25年7月29日」の情報から、昭和25年（1950）7月29日に当時山口大学教育学部生であった小川宣氏をはじめ藤本氏・山本氏・棟近氏により遺跡地調査が実施されHO4が採集[註2]され、同日花岡八幡宮宮司からHO1が寄贈、昭和28年（1953）以降[註3]に小川氏により再び遺跡地にてHO2・5が採集され、山口大学に寄贈されたと推測される。

HO1はほぼ完形の須恵器提瓶であり、口縁と把手を部分的に欠失する。全長は25.0㎝、体部径は20.5㎝、体部厚は14.9㎝を測り、口径は7.0㎝に復元される。頸部は直立しており、口縁内端を肥厚させている。腹面にはカキ目が施されており、背面は回転ヘラ削りが施される。双耳は角状を呈しているが、形骸化が進行している。**HO2**も須恵器提瓶。口縁から体部半ばまでの破片で、体部背面を欠失する。焼成不良で内面は灰褐色を呈する。1と同様腹面にカキ目を施す。頸部は大きく外反しており、口縁外端をわずかに肥厚させている。口径は9.9㎝に復元される。肩部に双耳が折損した痕跡が残っている。**HO3**は須恵器坏蓋。天井部1/4程度が残る破片で、口縁端部を欠失している。径は天井口縁境界部の稜および回転ヘラ削り痕から復元した。口径は13㎝弱、器高は3㎝程度と推定される。回転ヘラ削りは天井部上位にのみ施される。**HO4**は須恵器坏身口縁部片。小片のため口径復元不能。受け部から内傾して直線的に伸びる口縁を有しており、内端の段は消滅している。残存部の内外面とも回転ナデ調整。**HO5**は銹化が著しく、原面の確認がほぼ不能な状態にある鉄器であるが、有茎平根系の方頭式鉄鏃と推定される。現長5.5㎝、最大幅3.35㎝を測り、現重量は26.02gを量る。この他、下松市郷土資料展示収蔵施設「島の学び舎」にも「周防国花岡八幡宮裏山古墳」の注記がある須恵器甕体部片が存在する。

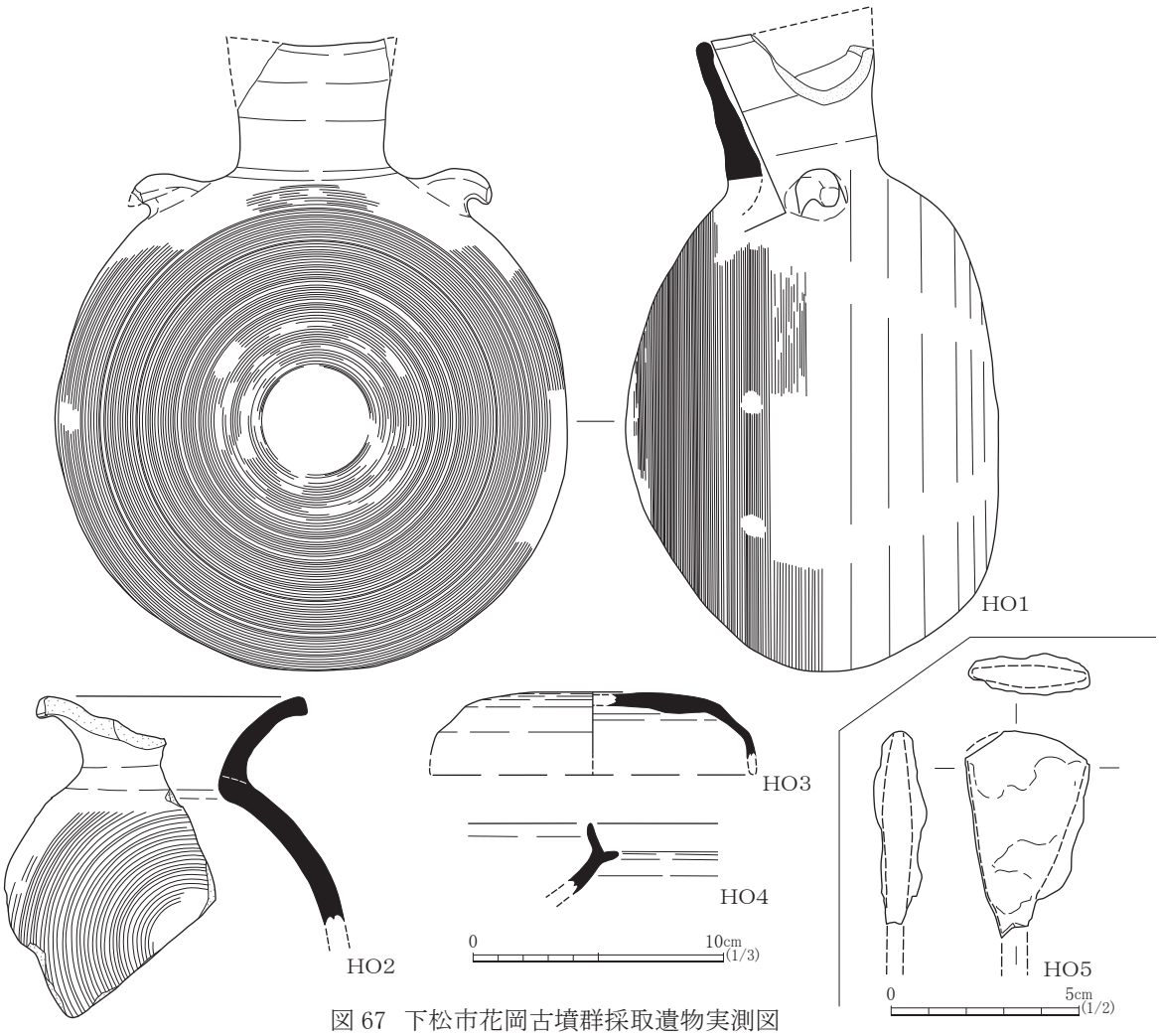


図 67　下松市花岡古墳群採取遺物実測図

写真 114　下松市花岡古墳群採取遺物

[御堀遺跡]（図68～70、写真115～117のMH1～9）

当館遺物収納コンテナNO．9、収納袋NO．13に納入されていた資料群である。ビニール大袋内に小袋が納入された状態で保管されており、前者に須恵器片28点と土師器片1点、後者に須恵器片5点と土師器片1点が入っていた。当館遺物収蔵台帳を見ると、大袋に「御堀円墳付近」、小袋に「大内御堀下堀　原始墳墓地区」と書かれていたようであるが、赤色油性マーカーで書かれていたらしく消滅していた。御堀円墳は昭和45年（1970）に緊急発掘調査が実施され、その後開発により消滅した馬塚古墳（冨士埜ほか1971）の可能性があるものの断定しがたく[註4]、小字下堀は宮島町の東に接する地域（現在のユニクロ山口店からスポーツデポ山口店周域）に残る。昭和30年代までに大内御堀にて判明していた墳墓の状況を鑑みると（佐伯1958、1961）、馬塚古墳周域から象頭山山嶺周域（現在の御堀遺跡南西端部から象頭山墳墓群西部）にて採取された可能性が高いように思われる。土器自体に赤色インクで注記されている「御堀　Ⅰ8」「御堀　2Ⅱ」などは、何らかの地区割と推定されるものの、踏査記録が残っていないため詳細は不明である。採取年月日に関しては、遺物の注記に「25.12.1□」と「26.12.18」があり、昭和25年（1950）もしくは昭和26年（1951）の12月に小野忠熙氏または本学学生により採取されたのであろう。

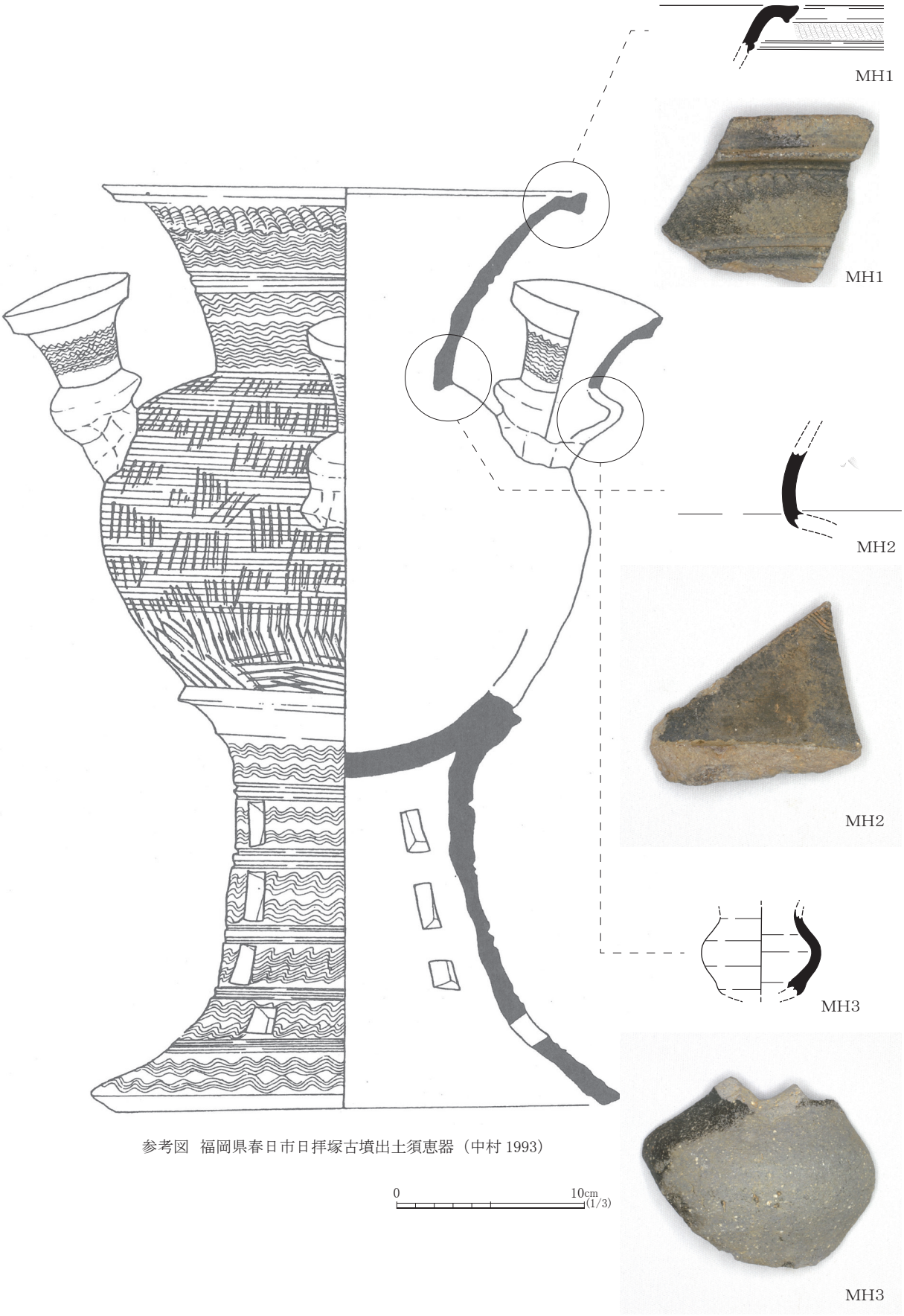
報告資料は全て須恵器である。**MH1**は壺口縁部片。「く」字状に屈曲する口縁部で、下端に断面半円形の突帯を1条廻らせている。頸部には2条の沈線が遺存しており、上部に櫛描波状文を密に施している。**MH2**は壺頸部片。小片であるが、基部で径12～13㎝になると見られる。ゆるやかに外反する頸部で、上端にわずかに櫛描波状文が残る。**MH3**は壺体部。腹部復元径は6.4㎝と小型であることから、子持壺の一部と見られる。子持壺は当県では狐塚古墳（山口市阿東徳佐）、桜の木古墳（山陽小野田市）、青井1号墳（下関市豊浦）の3例しか知られておらず、貴重な資料と言える。**MH4**は器台の台底部。外面に斜め方向の平行叩き、内面下位に同心円当て具痕が残る。**MH5**は器台脚部片と見られる。上端に2条、下端に1条の沈線が残り、間に上下2条の櫛描波状文が下から上の順に施される。長方形スカシの側面が残っている。**MH6**は器台脚裾部片。裾端部を欠失しており、断面三角形の突帯が1条廻る。突帯の上部に8本単位の櫛描波状文が廻る。掲載図ではMH1～3を子持ち壺、MH4～6を器台として報告しているが、同一個体であることを示すわけではない。

MH7は他の資料とは大きく時期が異なり、8世紀前半代の坏蓋である。低いドーム状の天井部から、ゆるやかに内湾して口縁に降下する。口縁端部を垂直に下垂させ、端部は丸く収めている。外面は回転ナデ、内面は口縁部に回転ナデ、天井部に不定方向のナデが施される。復元口径16.6㎝、残高3.1㎝を測る。**MH8**は6世紀後半の坏身で、ほぼ完形に復元される。焼き歪みが顕著な個体で、口径10.3～11.8㎝、器高3.6～4.4㎝を測る。外面の回転ヘラ削りは器高の1/2に施される。**MH9**は6世紀末～7世紀初頭の坏身で、外面の回転ヘラ削りは底部付近にのみ施される。復元口径9.3㎝、器高4.15㎝を測る。

大内御堀は、椹野川の支流である仁保川の下流右岸、山口盆地の東に接する大内盆地の北縁部にあたり、西から象頭山墳墓群、横穴式石室を有する馬塚古墳、入野石棺、全長28mの前方後円墳である大内氷上古墳（谷口1986）、山崎古墳、高尾古墳群、妙見社古墳群、調査を経ず消滅した氷上古墳群（現在は金成団地と呼称され、仏供田遺跡に包括される）（森田2001a）が存在し、弥生時代以降活発な造墓活動が見られる地域である。部分的に高尾古墳群採取の須恵器器台[註5]の報告（森田2001b）などが知られるものの、未調査の遺跡が多数で詳細不明な点が多い。当資料群は、断片的ではあるが大内御堀西端部に形成された墳墓の時期、性格を示すものとして貴重な資料となる。

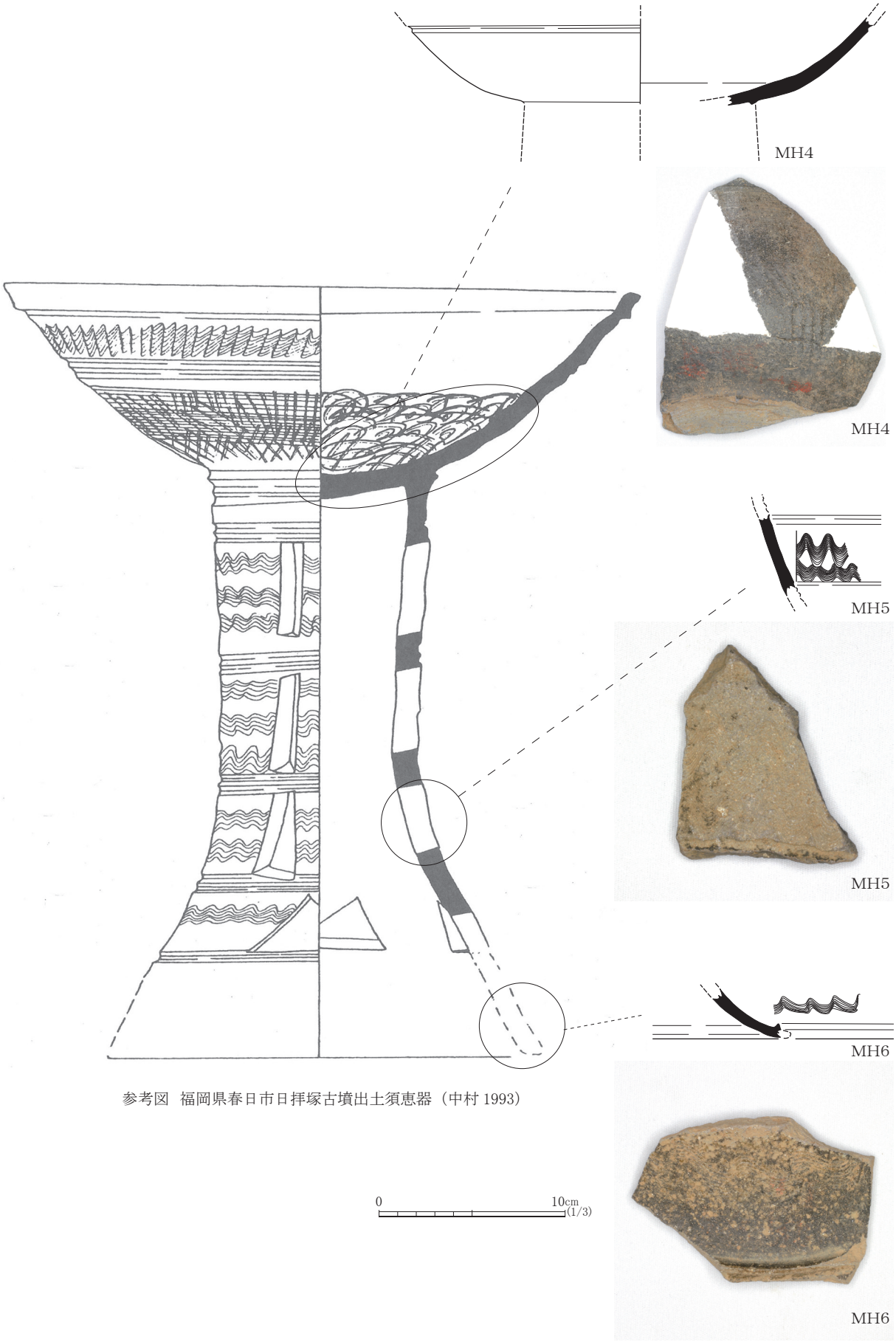
[小平尾遺跡]（図71、写真118のKBO1）

当館遺物収納コンテナNO．11、収納袋NO．1に単独で収納されていた資料である。須恵器壺の頸



参考図　福岡県春日市日拝塚古墳出土須恵器（中村 1993）

図 68・写真 115　山口市大内御堀採取遺物①



参考図　福岡県春日市日拝塚古墳出土須恵器（中村 1993）

図 69・写真 116　山口市大内御堀採取遺物②

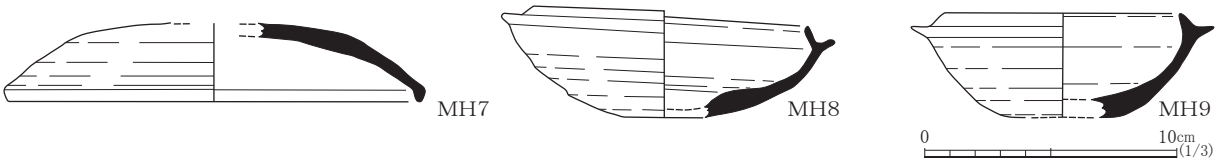


図 70　山口市大内御堀採取遺物実測図③

写真 117　山口市大内御堀群採取遺物③

図 72・写真 119　光市浅江採取遺物

～底部片で、内面には「玖珂郡 余田村　祝部 小平尾　28.4．16」の注記を有する。同封された遺物カードには「遺物名 祝部　発見地 山口縣玖珂郡余田村　発見者～発掘者□（名） 西本清槌　発見～発掘年月日 昭和28年4月16日　出土状況 余田村中央部に位し お宮下にて発見 当所は以前古墳があったと称される地である。遺物は土中にうもれていたものを発見　所蔵者 山口大学」と記載され、出土状況略図として出土地点の地図が描かれている。以上の情報から、出土地は柳井市余田の「小平尾遺跡（古墳時代遺物散布地）」と称せられる周知の埋蔵文化財包蔵地と見て間違いない。

須恵器壺KBO1は器壁の厚い個体で、器面調整は体部外面下位に回転ヘラ削りが施されるほかは回転ナデ調整。腹部復元径12.2㎝、残高8.7㎝を測る。遺物カードの記載どおり、古墳副葬品の可能性もあるが、遺跡自体の性格が不明瞭なため断定できない。

［光市浅江］（図72、写真199のAE1）

当館遺物収納コンテナNO．3、収納袋NO．5に単独で収納されていた資料である。完形の土師器皿で、底部外面に「光市浅江　田中義雄氏寄贈　1953．3．7」の注記を有する。同封の遺物カード表面には「発見地 光市□（浅か）江 4057番地附近　発見者～発掘者名 田中伸平　発見～発掘年月日 不明　出土状況 土師器」、裏面には「（1）干□（魃か）により地下水位に昇降あり　（2）砂層.□（のか）み？　（3）□（盛か）□（土か）している　（4）地表面下1丈1尺より出土」の記載が見られる。光市浅江は島田川右岸河口に残る地名であり、番地から現在の光市浅江4丁目付近[註6]の地下3.3m地点、当地は埋め立て地であることから、島田川により運ばれた川砂もしくは海生砂から出土したと思われる。

AE1は京都系土師器で、手づくね成形である。口縁を外方に屈曲させ端部を跳ね上げる、いわゆる「て」の字状口縁の皿で、当県では稀少な資料と言える。精緻された胎土や、灰白色（部分的に黄橙色）を呈していることからも、搬入品と推定される。口径9.6～9.8㎝、器高1.4㎝を測る。11世紀代の所産と見られる。

［島田川流域採取遺物］（図73、写真120のSDG1～3）

3点ともに須恵器坏蓋で、遺物収納コンテナNO．93、収納袋NO．27に収納されていた。SDG1の天井部外面に「島田川中流」、SDG2天井部外面に「周防 和田山（6）」と注記されている。SDG3に注記は見られない。

本学では、昭和25年（1950）から昭和27年（1952）にかけて、山口県岩国市周東町に源を発し、光市で瀬戸内海に流入する島田川の流域遺跡群を調査するため、当時教育学部光分校に勤務していた小野忠熙氏を中心に「山口大学島田川遺跡学術調査団」が結成され、中流域に分布する弥生時代の遺跡を中心に発掘調査を実施し、それと同時に、上流から下流域の踏査も行い、遺跡の分布状況を確認している（小野ほか1953）。当資料も、この分布調査の際に採取または寄贈されたものと思われる。SDG1の島田川中流は旧三丘村（後の熊毛町、現周南市東部）や旧周防村（後の周南町、現光市）を指すと思われ、SDG2の周防和田山は島田川左岸、旧三丘村と旧周防村の境界にあたる周南市小松原に立地する和田遺跡である可能性が高い[註7]が、断定できない。

SDG1は歪みの大きな完形の蓋で、つまみを持たない扁平な天井部から屈曲気味に口縁に降下する。口縁端部はわずかに下垂させ丸く収める。器面調整については、天井部は内外面とも不定方向のナデ、口縁部は内外面とも回転ナデが施されるものの、やや粗雑である。口径13.2㎝、器高1.65㎝を測る。SDG2は口縁の一部を欠失するがほぼ完形の蓋であり、天井部に扁平な擬宝珠状つまみを持つ。器壁の厚い扁平な天井部から屈曲して口縁に降下し、口縁端部をやや外方に下垂させる。口縁内端には焼成時の坏口縁の溶着が見られる。器面調整は天井部外面のみ回転ヘラ削り、他は回転ナデが施され

る。口径12.3㎝、つまみ径2.35㎝、器高2.05㎝を測る。**SDG3**は輪状つまみを有する蓋で、口縁部を半損している。扁平な天井部は外面がやや凹み、ヘラ切り痕をそのまま残す。天井部から屈曲気味に口縁を降下させ、口縁端部はわずかに下垂させる。口径17.7㎝、つまみ径6.1㎝、器高1.65㎝を測る。SDG1～3はいずれも9世紀代の資料である。

[山口県女子師範学校・山口県立室積高等女学校旧蔵遺物]（図74・75、写真121・122のUK1～3）

UK1・2は遺物収納コンテナNO. 93、収納袋NO. 26に収納されていた須恵器蓋坏であり、UK3は遺物収納コンテナNO. 93、収納袋NO. 23に単体で収納されていた須恵器壺である。問題となるのが資料に貼られた注記シールで、UK2底部外面には「山口縣女□（子か）師範□（学か）□　所属　第一郷□（土か）室　□□　第七□（二か）□（號か）」、UK3腹部外面には「山口縣立室積高等女学校　□属　第一郷土室　□（番か）號　第七三號」と記されている。

UK2に記される「山口県女子師範学校」は山口大学教育学部の前身校の一つで、大正3年（1914）に山口県立工業学校から転身し開校した「山口県室積師範学校」が大正9年（1920）に改称したもので、昭和18年（1943）に「山口県師範学校」と統合するまで存続した校名である。対する「山口県立室積高等女学校」は、昭和11年（1936）に開校し、昭和23年（1948）には学制改革により「山口県立光女子高等学校」に改称、翌昭和24年（1949）には「山口県立光高等学校」と統合している（杉原1975）。つまり両者は全くの別学校である。一方で資料に貼られたシールの様式（サイズ、項目、印字が青色インクで印刷され、書き込みが墨であること）は同一で、資料番号も「七二」「七三」と連番である。これをどのように理解すべきであろうか。

両校史を紐解くと、当初山口県立室積高等女学校は山口県女子師範学校内に併設して開校しており、昭和23年の学制改革のおりに室積新開、現光市立室積中学校敷地に移転している。第一郷土室は両校の共用施設であった可能性があり、県立高校の移転にともない、山口県師範学校に引き継がれ、恐らく小野忠熙氏を介して本学に収蔵されることとなったのだろう[註8]。

UK1は完形の須恵器坏蓋。天井部と口縁部の境界は曖昧で、ゆるやかに内湾しながら口縁に降下し、口縁端部は丸く収める。外面ヘラ削りは上部1/5にのみ施され、内外面とも回転ナデ調整が施される。内面天井中心に同心円当て具痕を残している。口径14.1㎝、器高4.1㎝を測る。**UK2**は完形の須恵器坏身。底部は上げ底状を呈し、やや開き気味に体部が立ち上がる。口縁は内傾して立ち上がり、端部を丸く収める。外面ヘラ削りは下部1/5にのみ施され、体部から口縁部にかけて内外面とも回転ナデ調整、底部は内外面とも不定方向のナデが施される。底部内面中央に同心円当て具痕を残す。両者は元来セット関係にあったと思われ、6世紀後半の所産である。**UK3**は須恵器壺。頸部より上を欠失しているが、体部は良好に遺存している。やや肩の張る器形で、底部は丸底である。底部は内外面とも不定方向のナデ調整、体部は内外面とも回転ナデ調整が施されるが、外面は部分的にヘラナデが行われている。頸基部から肩部にかけては斜め方向のハケが施される。腹部最大径16.4㎝、残高13.9㎝を測る。

[注記「FUKUSHŌJI」遺物]（図76、写真123のUK4）

遺物収納コンテナNO. 47、収納袋NO. 14に単体で収納されていた9世紀代の須恵器長径瓶である。底部外面に「FUKUSHŌJI 27.12.27」の注記が見られることから、昭和27年（1952）に採取された資料であることがわかる。問題となるのが当館遺物収蔵台帳の出土地名項目に記された「美祢郡秋芳町別府福昌寺」の地名であり、筆者が資料を確認した際は収納袋にそのような文字は残っていなかった。

この地名に関し調査を進めると、福昌寺という寺院は現存していないものの、現在美祢市秋芳町別府中村に所在する開創宝永3年（1706）の西福寺（山号満泉山）は、創建大同2年（807）とされる壬生神社

（美祢市秋芳町別府堅田所在）の社坊6寺の一つであった真言宗満泉寺（福正寺）の旧跡を興したとされ、明治26年（1893）に暴風で本堂が倒壊したため現在の地に寺域を移したそうである（篠田1991）。満泉寺（福正寺）旧跡は、三ケ台（標高335m）から南東に延びる舌状丘陵の東端部（標高約98m）、下嘉満八幡宮の北側とされ、現在は畑地となっている。周知の埋蔵文化財包蔵地としては、縄文時代から古墳時代の遺物散布地である真木遺跡に含まれる。

管見ではあるが、旧秋芳町別府に「FUKUSHŌJI」にまつわる地名は他に見当たらないこと、9世紀初頭創建とされる神社の社坊跡地から当資料が出土したとしても時期的に矛盾が生じないことなどから、採取地を特定できるかに思えるが、現在の資料の状態が「美祢郡秋芳町別府福昌寺」と乖離していることを重視し、「不明資料＝UK」として報告を行う。

UK4は口縁を部分的に欠失するものの、ほぼ完形の長頸瓶である。丸味を帯びやや肩の張る体部にゆるやかに外反する頸部が付く。口縁端部は丸く収めている。やや器壁が厚い底部の外端に、断面方形の小ぶりな高台が「ハ」字状に付く。器面調整は、外面は全面的に回転ナデが施されるが、体部下位に部分的にヘラ削りが残る。内面も回転ナデが施されるが、肩部のみ横ナデを行っている。底部外面には曲線2条と直線1条からなるヘラ記号が施されている。筆順は写真123に示したとおりである。頸部から体部外面には灰と自然釉を被っている。胎土が精緻で焼成も良好であり、成形に熟練度の高さも見られることから、搬入品である可能性が高い。口径5.2㎝、腹部最大径10.2㎝、高台径6.7～6.8㎝、器高13.5㎝を測る。

［採取地不明遺物］（図77、写真124のUK5）

遺物収納コンテナNO．93、収納袋NO．22に単体で収納されていた須恵器長頸瓶で、肩部を部分的に欠失するものの、ほぼ完形で遺存している。当資料に関しては、資料自体への注記、収納袋への注記、遺物カードのいずれも欠落している。

UK5は器壁の厚い個体で、焼き歪みが見られる。無高台の平底から直立気味に体部が立ち上がる。肩部は水平に張りだし、頸部は大きく外反して口縁に至る。体部の器面調整は、肩部と底部付近に回転ヘラ削りが見られるほかは回転ナデが施される。頸部から口縁部は内外面とも回転ナデ調整。底部は内面が不定方向のナデ、外面もナデが施されるが繊維痕がわずかに観察される。口径8.4㎝、腹部最大径16.0㎝、底部径10.2㎝、器高21.5㎝を測る。

［採取地不明耳環］（図77、写真124のUK6～8）

UK6・7は遺物収納コンテナNO．7、収納袋NO．2に、UK8は遺物収納コンテナNO．93、収納袋NO．8に収納されていた。いずれも資料自体への注記、収納袋への注記、遺物カードが欠落しており、情報を一切保持していない。UK7・8は一見セット関係にあるように思えるが、収納状況からUK6・7が同一遺構から出土した可能性もあり、憶測の域を出ない。

UK6は比較的遺存状態の良い個体で、銅地金貼耳環と見られる。金板はおよそ半分が剥離しており、木口巻き込み部も剥がれ緑青が著しい。小野忠熙氏が調査を担当し、現在所在不明となっている下松市御屋敷山古墳出土品と形態やサイズが類似する（小野1961・横山2013）が、当資料の断面形はほぼ正円であることから、別個体と見られる。直径30.1～32.9㎜、孔径14.7～16.1㎜、厚さ8.6～8.7㎜を測り、重量32.0gを量る。**UK7**は遺存状態が極めて悪い個体である。地金は銅と見られるが、貼られた金属はほぼ遺存しないようである。直径25.4～26.1㎜、孔径16.6～18.0㎜、厚さ4.1～4.6㎜を測り、重量6.07gを量る。**UK8**も遺存状態が極めて悪い。UK7とほぼ同時サイズで、直径24.3～27.0㎜、孔径16.3～17.9㎜、厚さ4.4～4.9㎜を測り、重量6.98gを量る。

図 73　島田川流域採取遺物実測図

写真 120　島田川流域採取遺物

図 74・写真 121　山口県女子師範学校旧蔵遺物

図 75・写真 122　山口県立室積高等女学校旧蔵遺物

図 76・写真 123　注記「FUKUSHŌJI」遺物

図 77・写真 124　採取地不明遺物

表12 遺物（金属器）観察表

法量は残存最大値（）は復元値 ▲は他と合計

遺物番号	コンテナ・袋	種類	部位	法量 ①長さ(mm) ②幅(mm) ③厚さ(mm) ④重量(g)	備考
HO5	コンテナ25 袋8	鉄鏃	鏃身部	①55 ②35.5 ③8 ④26.02	有茎平根式の鏃身部片。鏃身先端部の一部と茎部を欠失する。錆化が激しい。 同封のカードに「桜ヶ丘□（高か）　花岡八幡　小川宣氏」の記載がある。
UK6	コンテナ7 袋2	耳環	完形	直径30.1～32.9　孔径14.7～16.1 ③8.6～8.7 ④32.05	比較的遺存状態が良い個体。銅地金貼耳環と見られるが、金の半分は剥離している。木口の緑青が著しい。
UK7	コンテナ7 袋2	耳環	完形	直径25.4～26.1　孔径16.6～18.0　③4.1～4.6 ④6.07	遺存状態が極めて悪い固体。銅地は緑青をふく。貼られている金属は剥離が激しく、種別不明。
UK8	コンテナ93 袋8	耳環	完形	直径24.3～27.0　孔径16.3～17.9　③4.4～4.9 ④6.98	遺存状態が極めて悪い固体。UK7とほぼ同形。貼られている金属の種別不明。

表13 遺物（土器）観察表

法量（ ）は復元値　△は残存値

遺物番号	コンテナ・袋	器種	部位	法量（cm）①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	焼成	備考
HO1	コンテナ93 袋24	須恵器 提瓶	完形復元可能	①(7.0)　③25.0 腹部最大幅20.5 腹部最大厚14.9	①②灰色(N6/)	密	良好	口縁の一部が欠失するが、ほぼ完形の個体。両肩に鍵状の把手が付く。腹部はカキ目調整、背部は回転ヘラ削りが施される。腹部中央に「花岡八幡宮々司　村上文建氏　寄贈　一九五〇・七・二九」の注記がある。
HO2	コンテナ45 袋10	須恵器 提瓶	口縁～体部	①(9.9) 頸部径(5.5)	①灰色(N5/～N4) ②灰赤色(2.5YR5/2)	密	やや不良	口縁部から腹部にかけての破片。背部と底部を欠失する。肩に把手の痕跡が残る。口縁を大きく外反させ、下端部をわずかに肥厚させる。体部側面はカキ目がナデ消されている。腹部に「提瓶　花岡八幡宮古墳出土」の注記がある。
HO3	コンテナ25 袋8	須恵器 坏蓋	天井～口縁部	③天井下△2.1 天井径10.2	①②青灰色(5B6/1)	密	やや不良	扁平な天井からなだらかに口縁に降下する。口縁端部を欠失する。回転ヘラ削りは天井部にのみ施される。天井外面に「花岡八幡宮　古墳より出土」の注記があり、「桜ヶ岡□　花岡八幡　小川宣氏」と書かれたカードが同封される。
HO4	コンテナ5 袋51	須恵器 坏身	口縁～体部		①②灰白色(7.5Y7/1)	密	良好	口縁から体部にかけての小片。内面に「下松市花岡八幡宮」の注記があり、「遺物名 弥生式土器片　発見地 下松市花岡町花岡八幡宮　発見者～発掘者 小川 藤本 山本 棟近　発見～発掘年月日 昭和25年7月29日」と書かれたカードが同封される。
MH1	コンテナ9 袋13	須恵器 壺	口縁部	③口縁下2.5	①灰色(N5/) ②灰黄色(2.5Y7/2)	密	良好	「く」字状に強く 屈曲する壺の口縁部片。口縁下端に突帯を1条廻らせる。頸部に2条以上の沈線を巡らせ、その上位に櫛描波状文を 施す。内面に赤字で「御堀　Ⅰ　25.12.1□」の注記がある。
MH2	コンテナ9 袋13	須恵器 壺	頸部		①②灰色(N4/)	密	良好	外面に櫛描波状文を施す。内面に赤字で「御堀　□（Ⅰか）」の注記がある。
MH3	コンテナ9 袋13	須恵器 小型壺	頸～底部	腹部径(6.4)	①灰色(N6/～N4/) ②灰色(N6/)	密	良好	半損品であり、口縁部と底部を欠失している。子持壺に付く 子壺と見られる。注記は見られない。
MH4	コンテナ9 袋13	須恵器 器台	器台底部		①灰色(N5/) ②灰白色(N7/)	密	良好	外面上部に沈線が1条廻る。外面に平行叩き、内面に同心円当て具痕が残る。外面に赤字で「御堀　Ⅰ8」の注記がある。
MH5	コンテナ9 袋13	須恵器 器台か	脚部		①灰白色(10Y7/1) ②灰色(N5/)	密	良好	沈線による区画帯に櫛描き波状文が施される。長方形スカシの片側面が残る。注記は見られない。
MH6	コンテナ9 袋13	須恵器 器台か	脚裾部		①暗灰色(N3/) ②灰白色(5Y7/2)	密	良好	裾端部は欠失する。端部の上位に沈線を1条巡らせ、その上位に8条の櫛描き波状文を施す。外面に赤字の注記は判読不能。
MH7	コンテナ9 袋13	須恵器 坏蓋	天井～口縁	①(16.6) ③△3.1	①②灰色(N7/)	密	良好	やや扁平なドーム状の天井から内湾して口縁に降下する。口縁端部は下垂させ、丸く 収める。外面に赤字で「御堀　2Ⅱ　26.12.18」の注記がある。
MH8	コンテナ9 袋13	須恵器 坏身	完形復元可能	①10.3～11.8 ②3.2 ③3.6～4.4	①灰白色(N7/)～灰色(N4/) ②灰色(N6/)	密	良好	焼き歪みの大きな個体。口縁はシャープに仕上げる。外面は1/2下位に回転ヘラ削りを施す。内面に赤字で「御堀　□Ⅰ」の注記がある。
MH9	コンテナ9 袋13	須恵器 坏身	口縁～底部	①(9.3)　②(4.5) ③4.15	①灰白色(10Y8/1) ②灰白色(5Y8/2)	密	やや不良	底部から強く 内湾して体部が立ち上がる。口径に比して器高が高い。口縁は内傾して短く 立ち上がる。外面は底部付近のみ回転ヘラ削りが施される。内面に赤字で日付と見られる「2□1□1□（8？）」の注記がある。
KBO 1	コンテナ11 袋1	須恵器 壺	頸～底部	腹部最大径(12.2) ③△8.7	①灰白色(5Y7/1)～灰色(5Y5/1) ②灰色(N6/)	密	良好	器壁の厚い個体で、口縁部は欠失する。外面は体部下位に回転ヘラ削りが施され、上位は回転ナデが施される。内面に「玖珂郡　余田村　祝部　小平尾　28.4.16」の注記がある。
AE1	コンテナ3 袋5	土師器 皿	完形	①9.6～9.8 ②4.8 ③1.4	①② にぶい黄橙色(10YR7/3)～灰白色(2.5Y7/1)	精緻	良好	「て」の字状口縁を有する土師器皿。内外面ナデ調整が施される。胎土も 精緻で、搬入品と見られる。底部外面に「光市浅江　田中義雄氏寄贈　1953.3.7」の注記。
SDG 1	コンテナ93 袋27	須恵器 坏蓋	完形	①13.2 天井部径7.9 ③1.65	①② 灰色(N6/)～灰白色(5Y7/2)	密	良好	歪みの大きな個体。扁平で、天井につまみを持たない。天井から口縁に屈曲気味に下降し、口縁下端をわずかに肥厚させる。天井部外面に「島田川中流」の注記がある。
SDG 2	コンテナ93 袋27	須恵器 坏蓋	ほぼ完形	①12.3 天井部径8.3 つまみ径2.35 ③2.05	①灰色(5Y6/1) ②灰白色(N7/)	密	良好	器壁の厚い個体。天井部の中央に扁平な擬宝珠状のつまみが付く。低い天井部から屈曲して口縁に降下する。口縁端部はわずかに外方に下垂させる。外面に「周防村　和田山　(6)」の注記がある。
SDG 3	コンテナ93 袋27	須恵器 坏蓋	ほぼ完形	①17.7 天井部径11.5 つまみ径6.1 ③1.65	①② 灰色(N7/)～灰白色(2.5Y7/1)	密	良好	環状つまみを有する扁平な蓋。天井部はへこみ、ヘラ切り痕をそのまま残す。天井から屈曲気味に口縁に降下し、口縁端部をわずかに下垂させる。注記はないが、SDG2と同封されていた。
UK1	コンテナ93 袋26	須恵器 坏蓋	完形	①14.1 ③4.1	①②灰色(5Y5/1)	密	良好	ドーム形の蓋で、天井部と口縁部の境界はあいまいとなっている。上部1/4に回転ヘラ刷りが施されるが全周しない。天井部内面中央に同心円当て具痕が残る。風化が進行していないことから、古墳の副葬品であった可能性がある。UK2とセット関係か。注記は見られない。
UK2	コンテナ93 袋26	須恵器 坏身	完形	①12.8 ②7.7 ③4.0	①灰色(5Y5/1) ②灰色(10Y6/1)	密	良好	凹み底の個体で、底部内面中央に同心円当て具痕が残る。口縁は内径してやや長く 立ち上がるが、内端の段は消滅している。外面下位1/4に回転ヘラ削りが施される。底部外面のシールに「山口縣女□（子）師範□（学）　所属　第一郷□（土）室　第七□（二）」の注記がある。
UK3	コンテナ93 袋23	須恵器 壺	頸～底部	腹部径16.4 ③△13.9	①②灰色(N6/)	密	良好	口縁部から頸部を欠失している。やや肩の張る個体で、体部最大径は肩部の下位にある。底部は丸底。頸部下から肩部にかけて斜め方向のハケ調整を施す。腹部外面シールに「山口縣立室積高等女学校　属　第一郷土室　號□　七三號」の注記がある。
UK4	コンテナ47 袋14	須恵器 小型長頸瓶	ほぼ完形	①5.2 腹部最大径10.2 高台径6.7 ③13.5	①灰黄色(2.5Y6/2) ②灰白色(N7/)	精緻	良好	腹部のあまり張らない胴部にゆるやかに外反する口縁が付く。底部外端には断面方形の小ぶりな高台が「ハ」字状に付く。頸部外面に灰と自然釉が被る。焼きが良く、胎土も 精緻であることから搬入品である可能性がある。底部外面に「FUKUSHŌJI　27.12.27」の注記がある。
UK5	コンテナ93 袋22	須恵器 長頸瓶	ほぼ完形	①8.4 腹部径16.0 ②10.2 ③21.5	①灰色(5Y6/1)～オリーブ黒色(5Y3/1) ②灰色(5Y6/1～N6/)	密	良好	器壁が厚く、焼き歪みが大きい個体。肩の張る体部で、腹部は張り出さない。底部はやや上げ底を呈する。口縁は緩やかに外反しながら開く。体部外面下位と上位に回転ヘラ削りを施す。注記は見られない。

3. おわりに

本稿に掲載した資料で採取時期がわかるものは、全て昭和20年代中ごろから後半にかけての年月日を有していることから、新制大学として本学が設立した当初に小野忠熙氏と学生が採取または寄贈を受けた資料と見られる。そのほか、小野氏が正式に発掘調査を実施した山口県内遺跡出土品を含めると、当館が所蔵する構内遺跡出土品以外の遺物総量は、収納コンテナで約100箱を数える。当初これらの資料は小野氏が所属した教育学部をはじめ学内各所に収蔵されていたそうであるが、昭和52年（1977）3月の埋蔵文化財資料館竣工後は、当館に集約されることとなった。これらの資料は、見島ジーコンボ古墳群や潮待貝塚出土遺物など極一部を除き、未だ死蔵状態にある。

当館に着任以降、筆者はこれらの資料群の公開に努めているが、たびたび障害となっているのが、資料情報の欠落であった。平成26年度は、一定の情報を保持している資料や遺存状態の良好な未公開資料を選択し、観覧者へ資料情報を求めるとともに、資料情報の重要性を訴えかける企画展を開催した。その際に寄せられた情報と、筆者自身の調査により得た情報を付したのが本報告となる。当館の全所蔵品に対して、筆者が在職中に整理作業等を完遂することはないであろうが、粘り強く収蔵資料の学術公開を継続していく所存である。

【註】

1）横山成己（2019）「第36回企画展『情報求む！～収蔵庫に眠る由来不明の考古資料たち～』を開催」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成26年度－』，山口　に開催目的と展示内容を記している。

2）『山口県文化財概要　第4集』（小野ほか1961）所収の「山口県埋蔵文化財一覧」には、「発見年月日：昭和25年7月27日　発見者指名：小川宣　所在地：下松市花岡町花岡八幡神社　遺跡および出土品：弥生土器片（多数）」の記載が見られる。内容物から見てコンテナNO.5袋NO.51に関連する記載と考えられるが、発見年月日がわずかに異なる。

3）小川宣氏は昭和28年4月に山口県桜丘高校に着任されている。

4）昭和33年発行の『大内村誌』では、馬塚古墳は全長71尺（約21m）の前方後円墳として紹介されている（佐伯1958）。

5）森田氏の報告では、須恵器器台は当館所蔵品で、昭和48年（1973）の表採品とされるが、所在不明である。

6）光市役所建設部都市計画課都市計画係に1953年当時の浅江4057番地の所在を確認したところ、古い記録に残っていないが、現在の浅江4丁目430-2付近の可能性があるとご教示いただいた。

7）『島田川』（小野ほか1953）によると、和田遺跡は弥生土器の遺物包含層（土器棺を含む）とされており、今回報告資料とは時期的な乖離が大きい。和田遺跡の南に隣接する虹川遺跡も弥生時代から古墳時代にかけての遺物散布地とされる。

8）当館に「第一郷土室」のシールが貼られた資料が3点しか存在しないのは、考古資料が元来この3点に限られていたことがその理由として考えられるが、昭和21年（1946）の失火により校舎の大半が消失したことが原因である可能性もある。

【文献】

小野忠熙ほか（1953）『島田川　周防島田川流域の遺跡調査研究報告』，小野忠熙（編），山口

小野忠熙（1961）「御屋敷山古墳」，小野忠熙・山口県教育委員会（編）『山口縣文化財概要　第4集　埋蔵文化財』，山口

篠田善熊（1991）「神社と寺院・教会」，秋芳町史編集委員会（編）『秋芳町史　改訂版』，美祢（山口）

杉原猛熊（1975）「学校教育」，光市史編纂委員会（編）『光市史』，光（山口）

冨士埜勇ほか（1971）『山口市馬塚古墳緊急発掘調査概要』，山口県教育庁社会教育課（編），山口

佐伯敬紀（1958）「第三編　先史時代」，河野通毅（編）『大内村誌』，周南（山口）

佐伯敬紀（1961）「大内町の諸遺跡」，小野忠熙・山口県教育委員会（編）『山口県文化財概要　第4集　埋蔵文化財』，山口

中村浩(1993)「福岡県春日市所在日拝塚古墳出土須恵器について―東京国立博物館列品の検討を中心として―」, 九州古文化研究会(編)『古文化談叢』第30集(上), 北九州(福岡)

谷口哲一(1986)『大内氷上古墳』, 山口県教育委員会文化課・山口県埋蔵文化財センター(編), 山口

森田孝一(2001a)「山口市氷上遺跡(仏供田遺跡)の破壊と遺物について」, 森田孝一(編)『山口県考古学研究資料集報』, 美祢(山口)

森田孝一(2001b)「山口市高尾山古墳群内の表採須恵器に関して」, 森田孝一(編)『山口県考古学研究資料集報』,美祢(山口)

横山成己(2013)「下松市御屋敷山古墳の出土遺物」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成24年度－』, 山口

横山成己(2014)「下松市花岡八幡宮裏山資料と花岡古墳群」, 山口考古学会(編)『山口考古』第34号, 防府(山口)